

韓国人留学生の自然発話に見られる誤用

高 木 南欧子

The aim of this study is to analyze misuse that Korean international students, who are in the advanced course of Japanese, could make in oral expression in interview sessions. One main issue with misuse is the omission of particles that are necessary in Japanese grammar. By exploring usage examples such as the particle “wo”, it was found that usage patterns in the native language are often the cause of this misuse. Further investigation should be undertaken to identify related causes.

キーワード：母語，韓国語，誤用，留学生，ゼロ助詞

1. 研究の目的

外国語の運用力は、習得している語彙、統語、発音、聴解などの各要素に支えられている。そして、それらの習得の度合いによって、初級や中級、あるいは上級、超上級におけるタスクの達成が可能となり、コミュニケーションツールとしての言語運用が可能になる。この運用力の向上は、言語習得の過程と深い関係にあるが、実際には、言語の習得過程には多くの要因が複雑に関わっており、その一つに学習者の母語の影響があると考えられている。

母語と目標言語の特徴が近ければ、学習上の困難はより少ないというのは予想できることである。実際に日本語教育において、比較的習得が早いと言われるのは韓国語を母語とする学習者である。韓国語と日本語は、語順を同じとし、漢語を含め、共通する語彙が多く、類似点が多い。梅田(1985: 48-49, 2004: 8)は、日本語と韓国語は共通した特徴があり、文

法構造が似ていて、双方の学習者にとって学びやすい言語だと指摘している。習得までの学習期間も短いという報告（渡邊1996：6）もある。大学で学ぶ学習者の学習歴に関し聞き取り調査を行った結果、中国語母語話者の平均学習時間は1240時間、ドイツ語母語話者1258時間、韓国語母語話者は782時間であったという。

習得の早さは、転移による影響という観点で考えられることもある。「転移」とは、第二言語学習の過程において、母語の特徴が第二言語の習得に影響を及ぼす現象を指す。転移には、習得の成功に寄与する「正」（プラス）の転移と、習得の過程を邪魔し、誤用を起こす「負」（マイナス）の転移がある。韓国語を母語とする日本語学習者の習得が早いのは、類似点の多さから「正」の転移が影響を及ぼしていると考えられるが、習得の過程で誤用が起きないかということ、そういうわけではない。学習が進んだ上級レベルにおいても、文法や適切な語句の使用、発音などの面に課題は残り、その中には負の転移によるものではないかと推測されるものがある。

しかしながら、学習項目を立てる際には、第一言語からの転移による影響はあまり意識されることはない。学習は自然の習得順序によって、学習者共通の発達段階を1段階ずつ経ていく、という考えのもとにシラバスが組まれ、教室運営が行われる傾向がある。しかし、学習が進むにつれ、学習者個々に弱点や能力、ニーズの異なりが顕著になってくる。特に、上級になると、専門性も細かく分岐していき、共通の発達段階が見出しにくくなるため、言語形式よりタスクの達成がされたか否かが重視される教室活動になりやすい。タスク自体が高度で複雑になるため、本来であればより自然さ、正確さが求められるはずの言語形式には注意があまり向けられなくなる傾向がある。大学に在籍する留学生は上級であることが多いが、特に韓国語を母語とする学習者は、発話が流暢であるために、タスクの達成過程における言語形式の課題が見えにくく、誤用が見逃され、そのまま定着してしまう可能性がある。このような事態を防ぐためには、まず運用の実態を詳細に観察し、問題点を明らかにし、その結果を積み上げていく必要がある。

本稿では、大学の学部に在籍する韓国人留学生の実際の発話を収集し、そこに現れる誤用や特徴を概観し、特に似た体系を共通に持つと言われている助詞の使われ方に焦点をあてて分析を行う。誤用の背景の解明は、上

級コースにおける言語形式の改善方法を考える助けとなり得る。韓国語を母語とする留学生が、上級からさらに進んだ超上級へ進むための課題を明らかにし、コースデザインの方方向性を考える。

2. 先行研究

自発的な日本語の発話に関する研究は、近年盛んになり、学習者が産出した言語資料を収集した学習者コーパスも作られるようになってきた。学習者コーパスのうち、自発発話の代表的なコーパスとしては、OPI (Oral Proficiency Interview test) をもとにした「KYコーパス」があげられる。このKYコーパスを使用し、韓国語母語話者の動詞の使用状況を分析したものに金庭 (2003) がある。レベルが上がるにしたがって、のべ動詞数、異なり動詞数が増加していく一方、レベルの高い学習者ほど同じ動詞を多用する傾向があることが報告されている。主に5つの基本的な動詞があげられ、これらの動詞を含む用法の違いが習得過程に影響を与えている可能性が指摘されている。

他にインタビューによって収集したデータを分析したものとして、若生 (2010, 2012) がある。若生 (2010) は、韓国の大学の日本語専攻の学生に対するインタビューデータに見られる誤用を、負の転移に起因するものと、転移とは考えがたい誤用の2つに分けて考察を行っている。ここで述べられている誤用例には、本稿で見る誤用と共通するものが見られ、示唆に富む。これによると、負の転移として考えられるのは、日本語「に」を韓国語 ‘ul/ lul’ (日本語「を」に相当) で置き換えたことによる誤用 (「友だちを会う」)、韓国語 ‘ey’ を日本語「に」で置き換えたことによる誤用 (「私にいい経験だと思った」)、および「見る」「もらう」「聞く」といった動詞の意味範囲の差異に起因する誤用があげられている。また負の転移とは考えがたい誤用として、場所の「に」と「で」の誤用、説明のモダリティ「のだ」の丁寧形の多用が指摘されている。また若生 (2012) では、位置名詞と「に」、場所名詞と「で」の結びつきについて、穴埋めアンケート調査を用いた分析が行われている。

これら先行研究から、韓国語を母語とする学習者の中間言語には共通する特徴があり、転移の影響は無視できないレベルにあるのではないかという仮説が立てられる。しかし、概観した限りでは、日本の大学に在籍し、日本語が上級レベルにある韓国人留学生の自然発話を同一条件のもと収録

し、韓国語の母語の影響を分析したものは見られなかった。そのため、本稿では、次の3にあげる方法でデータを収集し、母語の転移の可能性に関する考察を行う。

3. 調査方法

本稿で使用するデータの概要を表に示す。自発発話を録音して書き起こしたものを分析対象として使用した¹。発話のテキストの解析には形態素解析エンジンMeCab、形態素解析用辞書にはUnidic²を使用した³。

発話を分析対象にした理由は、発話は作文と違い、誤用が生じた場合もそのまま音声としてデータに残ること、思考からアウトプットまでの時間的ずれが作文より少なく、素に近い文産出のデータが得られること、応答までの時間や内容を見ることで、思考の過程や課題の難易度を見ることができることにある。穴埋め問題ではなく、自発発話の形式にしたのは、問題点をあらかじめ限定せず、広くデータを収集することを目的としたことによる。

インタビューは、一人につき十分な発話量を確保する、難易度の異なる発話タスクを設け、メタ認知が働きやすい時間と働きにくい時間を作る、という目的から、OPIの形式を利用した。OPIのインタビューは、基本的に「導入部」「レベルチェック」「突き上げ」「ロールプレイ」「終結部」の5つのプロセス（牧野ほか2001：28）を踏み、所要時間は1人につき30分程度である。4人の発話時間数を合計すると全体で約2時間である。発話の内容を確かめるため、インタビュー直後に10分程度のフォローアップインタビューを行った。文法的な正誤の判定は筆者が行った。

表1 発話と発話者情報

発話者番号	発話語数	誤用数 ⁴	JLPT ⁵	OPI判定 ⁶	学習歴	日本滞在歴
S1	2253	39	N1	上級	4年	4.5ヶ月
S2	2921	41	N1	上級	11ヶ月	4ヶ月
S3	1960	29	N1	上級	5年	4.5年
S4	2653	37	N1	上級	2年	3年

（データ収集の時期は2013年）

4. 分析

発話語数について見ると、一番多いのがS2の2921個で、一番少ないのがS3の1960個であり、両者の間には1000個近くの差があった。これは、S2の話すスピードが早かったのに対して、S3の話すスピードが比較的ゆっくりしていたこと、また、S2は話しながら考えていくタイプであるのに対し、S3は難しい課題には沈黙を取り、考えてから話すタイプであることに起因すると思われる。OPIのインタビューレビューグリッド⁷から各タスクの達成度を見ても、この4名の日本語能力は同じ上級の範囲内であると判断できる。

以下では、4人の発話者に共通して見られた特徴をあげる。なお本稿では、誤用は、文法的正確さに欠けるものだけではなく、談話としての適切さに欠け、誤解を生む可能性のある文も含むこととする。

4.1. 助詞の脱落と誤用

日本語教育において、助詞は重要な学習項目の一つと認識されている。上級においても「理由は3つがあります」「**が**が不要」のような誤用はよく見られ、学習の必要性は依然として認識されている。しかしながら本データにおいては、助詞は適切に使用されていることが多く、学習項目として学んでいないはずの助詞の脱落が自然に行われている様子が見られた。

助詞の脱落そのものは話しことばではよくあることであり、この現象に関する研究は近年盛んに行われている。しかし、研究によって用語が違うことなどもあり、共通した見解を引用するのは難しい⁸。本稿では、加藤(1997: 35)⁹で試みられた分類を参考に、助詞の脱落現象を「助詞の省略」「ゼロ助詞」の2つに分ける。「助詞の省略」は助詞を補っても補わなくても、意味上、有意の差を生じないもの、「ゼロ助詞」は助詞を補うと意味上の差が生じ、不自然な文となるものを指す。

助詞の脱落と誤用の出現回数と種類を表2に示す。なお、「誤用」は文法的、談話的に適切さに欠けるものを指す。

表2 助詞の脱落と誤用の出現回数と種類

種類／発話者	S1	S2	S3	S4
助詞の省略	15	6	8	7
ゼロ助詞	5	0	3	6
誤用	8(4)	9(3)	2(0)	10(1)

* () は誤用のうち、省略によって生じた数

4.1.1. 助詞の省略

『新版日本語教育辞典』（2005：161）では、文頭以外に現れる格助詞のうち、省略できるのは「が、を、に（方向）、へ」であり、「に（相手、場所）、で、と、から、まで」は省略できないとされている。本データの中から、この例にあたるものを(1)にあげる。インタビュアーは「I」と示す。「Ø」は助詞がないことを示す。

(1) I：どんな人だったか覚えていますか

S1：OLさん？ 女の人で

スーツØ着ている女の人Ø仕事Ø終わってすごく疲れた顔Øして

ここでは、「スーツを」の「を」、「仕事が」の「が」、「顔をして」の「を」が省略されている。このような助詞の省略は、4人の発話者共通に見られた。不自然と思われるものはなかったが、S1において、ややくだけすぎた俗調的な響きを持つものが見られた。助詞の脱落による誤用と判定されたのは8箇所あった。この誤用の詳細については4.1.3で述べる。

省略された助詞は個人差があり、S1は「が」「に」、S2は「に」、S3は「を」、S4は「は」「に」が多かった。「に」が省略されていた例は、「日本来て」「船のって」「J R乗って」など、交通機関や乗り物の説明をする場面で多く現れていた。「船のって」「J R乗って」に関して言えば、助詞が省略されていたために分からなくなっているが、韓国語では「乗り物+に+乗る」というべきところは「乗り物+を+乗る」のように 'ul/lul'（「を」に相当）が使われるため、助詞を省略せずに発話が行われた場合、「を」

が出現した可能性はある。ただし、フォローアップインタビューをした際に確認したところ、4人全員が「JRに乗る」と正しく言うことができていた。

4.1.2. ゼロ助詞

ゼロ助詞は「無助詞」と呼ばれることもあるが、文頭に現れ、「は」の代わりに使われることが多い。「は」との違いは対比性を示さないことである。この用法の例をS3、S4の発話からあげる。

- (2) I：でもその人をどうやって見抜くのか その方法を教えてください
さい

S4：私~~は~~今までそんな長く生きてきたとは言えませんがね 一
応 初対面で分かりますね

- (3) I：社内から12歳以上も購買ターゲットにするべきだという意見
がでたら？

S3：それは全然 社内の人が何を言っても 審査があるんで
そういう意見~~は~~全然無駄だと思います

主題におけるゼロ助詞と、主題提示の「は」の違いについては、黒崎(2007)などによる研究があるが、共通しているのは、ゼロ助詞を単なる助詞の省略とは捉えず、意味がある省略ととらえる考え方である。本稿においても、主題提示に関わるゼロ助詞の用法は省略とは異なるという立場をとり、分けて考える。

表2を見ると、4人の発話者はこの助詞の用法を概ねうまく使っていると言える。ゼロ助詞は韻律的な要素を含めて考えるべきであるが、発話データを音声で聞いても、助詞の省略、ゼロ助詞の部分に不自然さはほとんど感じられなかった。

4.1.3. 脱落による誤用

助詞を省略すべきではないところで省略することによって誤用が生じている部分は、4人の発話をあわせると全部で8箇所であった。漢語名詞に

「する」がついて動詞になる際, 「を」が脱落するケースが2例, 疑問を表す補足節で「か」が脱落するケースが4例, 助詞が2つ重なるべきところで一つが脱落するケースが2例であった。漢語名詞の例を(4)と(5)にあげる。

- (4) S4: 一応 釣りができるポイント できないポイントがあるんです

初心者の場合 もうどこでもいいやと思って釣り~~を~~したら 絶対とれないと思います

- (5) I: 他の日常的な殺人事件などにも興味がありますか

S2: 殺人事件のようなことは興味がないんですけど (中略)

例えば殺人~~を~~する 人のその考えにはあまり興味がないんですけれど

一般に, サ変動詞は, 名詞に「する」をつけたものと言われているが, 名詞の後に「を」が必要になる名詞と, そのまま「する」をつければすむ名詞がある。(4)の誤用の背景には, このルールの過剰般化をした可能性がある。しかし, もう一つの考えられる原因としては, 韓国語では「釣りをする」というとき, 「を」にあたる 'eul' は省略が可能であり, 会話などでは, 'eul' は使われないことが多いということである。

(5)の「殺人~~を~~する人」については, 2つの間違いがある。一つは, 日本語では「殺人」を動詞として使う場合は「を」が必要であること, また, 普通動詞は「する」ではなく「犯す」であることである。しかしながら, 韓国語では, 「を」にあたる 'eul' を使うことはほとんどなく, 「殺人する」ということができる。

漢語名詞からの派生語の生成過程における韓国語と日本語の違いについて, 油谷 (2005: 99) の指摘がある。この指摘によれば, 日本語の場合, すべてではないが漢語名詞が動作性の意味を持つ場合, 「する」を接続させて動詞にすることができ, 状態性の場合は助動詞「だ」を接続させて形容動詞にすることができる。一方, 韓国語では両者はともに 'hada' をつけて動詞, 形容動詞にできるという。例をあげると, 日本語においては, 動作性の名詞「勉強」に「する」をつけて「勉強する」とし, 状態性の意味を持つ「有益」は「だ」をつけて「有益だ」とする。しかしながら, 韓国語

では、この二つはともに「する」にあたる ‘hada’ をつけることにより、‘勉強hada’（「勉強する」）という動詞、‘有益hada’（「有益だ」）という形容詞にすることができるという。つまり、漢語名詞から用言を派生させる場合、韓国語では動詞であっても形容動詞であっても ‘hada’ をつければすむのに対し、日本語では文法上どうふるまうかによって派生方法が変わるのである。

このように見ると、(4),(5)に現れている誤用は、もともと過剰般化が起きる可能性があるところに、類似の語彙体系が母語にあるがために、負の転移が起きているのではないかと推測される。

4.1.4. 韓国語における助詞の省略とゼロ助詞

談話におけるゼロ助詞に関しては、韓国語においても観察されており、研究報告もなされている。金（2009）では、実際の会話データからの無助詞（ゼロ助詞相当）の使用について調査、分析が行われ、特に主語名詞句を中心に考察がなされている。そこでは、4.1.2で見たような用法（主題提示における用法）に限定せず、「文構成要素の中で助詞が現れ得るところに助詞が現れない現象を、談話・誤用レベルにおいて指すもの」（金2009：41）とし、名詞句の性質、文のタイプ、動詞句の性質、主語の文内の位置などを取りあげ、量的に調査している。特に ‘i/ga’（日本語の「が」に対応することが多い）と、‘eun/neun’（日本語の「は」に対応することが多い）、無助詞（ゼロ助詞相当）をめぐる考察が行われているが、無助詞の用法は「会話の現場に存在するものを『指差し』、それについて何かを述べる」（金2009：74）とし、次のような例をあげている。

(6) あ、先輩o副店長なんですか？

（金2009：52）日本語訳部分のみ引用

(7) A：うん、俺、俺のいた時代は花見なんて一度もなくて、今回すごく楽しみだよ。

B：え、2年間なかったんですか？

先輩o大学2年間通ったんじゃないですか。

A：ああ。あのときは花見しなかったよ。

（金2009：56）

また、次のような例も、具体的に存在するものをさしているわけではな

いが、直前の発話そのものが「現場に存在するもの」としてとらえられるとしている。

- (8) イ：(略) 私は、前、休憩室に行ったとき本当に近くなってトイレに行ったら、ずらっと並んでるんですよね。漏れそうになって、本当にすみません、本当・・・中略

イ： 知ってます？

パク：それø昔のジョークですよ。 (金2009：70)

- (9) イム：イムハリヨンさん、兄弟は・・・。

リヨン：兄弟は5人兄弟・・・また父，母，もう・・・うちのかみさんなどなど，

そのとき，およそ8人家族だったからお部屋がなかったんですよ。－中略－

パク：その若いお嫁さんø大変だったでしょうね。

(9)のような例は、指示表現をともなっており、「指差し」機能をはっきりさせているとしている。このような主題名詞句とともに起こる無助詞という点で言えば、4.1.2で見た例(2)，(3)も主題における現象であるから、その点では同様である。特に(3)に関しては、「そういう意見」のように指示表現をともなっており、その点では確かに話の中の一部を「指差し」していると言えるかもしれない。しかし、本データにみられる無助詞の使われ方は、現場性もさることながら、談話の結束性も重要であるように思われる。

- (10) I：韓国で世襲はありますか

S3：お父さんが政治家で息子も政治家っていう有名な人øあんまりいないと思います

- (11) (韓国語を教える相手が見つからない理由を述べている場面)

S4：例えば土日しか教えることができないだったら 教わる側は の 時間と合わないかもしれないし

私ø何ø言っているのか分からない (笑)

(前半の「私ø」の部分)

(10)は、主題の「は」が本来ならあるべきところであるが、出現していない。この場面は、政治家の世襲についての話をしているところで、インタビュアーは日本の政治家と比較し、韓国に世襲の習慣があるかを尋ねている。インタビュアーとS3の間では、すでに命題の共有化が十分なされている状態である。(11)は、語学を教える人を見つけるシステムと、その過程にまつわる微妙な心理状態について、すでに2分あまり説明した後に発された文である。

本データは、インタビュー形式をとっているため、談話は比較的管理されており、結束性は高く、文脈の共有度も高いと言える。一般に、高文脈の支えがある環境では、発話は簡略化されていく傾向があると言われている。例えば、主人が妻に向かって「あれ」と一言言うだけで、その発話のニュアンスによって、妻が新聞を出したり、お茶を出したりした、というのは一昔前によく聞いた笑い話である。短い発話であっても、高文脈に支えられ、結束性の高い談話であれば、発話にかかるコストを抑えた会話が可能になる。結束性を支えるものは幅広い。発話場所、相手の談話、段落、文と文、語句と語句、音と音といった様々な単位での結束がある。この広い範囲からの支えから成り立つ結束性が、助詞の出現の有無にかかわっていると推測される。

4.1.5. ゼロ助詞の使用

加藤(1997)は、日本語において格助詞がゼロ助詞と代替可能かどうかの調査研究を行っている。これによると、「ガ」は用法の制限が特になくゼロ助詞と代替可能、「ニ」は直接受動文、使役文、形容動詞を連用成分にする用法では代替ができないとしている。この現象は、本データで収録した発話においても同じように観察することができる。しかし、受動文や使役文は出現数そのものが少ないうえに、動作主が示されない発話も多かったため、本稿においては判断を保留する。

本データにおけるゼロ助詞の使用例を概観すると、4人の発話者はこの用法の優れた使い手であると言える。4.1.4で見た韓国語における助詞の脱落現象が、日本語の脱落現象と共通していることから見ても、ゼロ助詞に関しては母語からの正の転移が起こっていることが推測される。

日本語教育においては、誤解を生じさせる危険を回避し、正用を求める考えから、ゼロ助詞は学習項目にされてこなかったと思われる。しかし、

近年は多様な接触場面が増えており、日本語学習者が教師の想定を超えたところで日本語と接していく可能性がある。多様な場面に即した日本語能力の習得という観点から、ゼロ助詞を学習項目に盛り込むことを検討すべき時期に来ていると言えよう。

4.2 助詞の誤用

自然発話においては、母語話者でも文法上の間違いをよくする。また、ねじれ文のような間違いがあったとしても、会話では話をしているなかで軌道修正を行うことが可能なため、本データにおいても発話者自身による自己訂正がよく見られた。ここでは、(4)、(5)以外に見られた助詞の誤用を一覧にしたものを表にあげる。なお、発話中に誤用があっても、直後に発話者自身が自己訂正を行っている場合は、単なる言い間違いと解釈し、分析対象から外している。

表3 助詞の誤用

発話例（正用の助詞）	誤用→正用	出現回数
(12) 私 <u>が</u> （は）結構人見知りだなと思いました	が→は	9
(13) 何でそんな殺人事件が起こる <u>の</u> （か）ということは興味があります	の→か	4
(14) 私は（ <u>が</u> ）考えてるのは私が偉い人ではなくて	は→が	2
(15) パスポートをコピーしてファックス <u>に</u> （で）送って	に→で	2
(16) ○○大学 <u>で</u> （に）留学している韓国人の	で→に	2
(17) 今携帯電話が <u>の</u> （の）メールがないです	が→の	1
(18) 一応、今、日本語が <u>を</u> （を）勉強しているから	が→を	1
(19) 何か相手 <u>を</u> （の）イメージを悪くする傾向が	を→の	1
(20) 両方のメディア <u>を</u> （に）接した私だから	を→に	1
(21) 新宿、そして横浜 <u>で</u> （から）出発するバスがあります	で→から	1
(22) ○○大学 <u>から</u> （が）韓国に旅行に行くんだけど	から→が	1

(23) 友達 <u>o</u> (に) もやめた方がいいよって言います	<u>o</u> → に	1
(24) 簡単だったら先生 <u>も</u> (が) 居眠りしてもそのまま続けたと思います	<u>も</u> → が	1

下線部は誤用, () 内が正用

目立って多いのが (12) の「私が (は) 結構人見知りだなと思いました」のようなタイプである。日本語の助詞「は」は韓国語の助詞 ‘eun/neun’ に対応し、日本語の助詞「が」は韓国語の ‘i/ga’ におおまかに対応していることは広く知られており、研究も数多くされている。(12)のタイプは、韓国語の ‘eun/neun’ がカバーする用法が、日本語の「は」の範囲とずれていることによると考えられ、負の転移が影響していると考えられる。(14, および(17)も「は」「が」に関わる問題であるが, 「XはYだ」という基本的な日本語の文型を知っていれば、この文型を利用して文を産出できそうにも思える。しかし、実際は日本人でもこのような言い間違いはする。

日本語の「を」に対しては、韓国語の ‘ul/lul’ が、対象や帰着点の日本語「に」対しては、韓国語は ‘ey/eykey’ が存在する。これらも使用範囲が似ているが全く同じではないため、(20)のような負の転移が起きていると考えられる。同様の誤用は、若生 (2010) でも報告されている。日本語では、「会う」に用いられる助詞は「に」であるが、韓国語の「会う」は、‘ul/lul’ (「を」に相当) が使われるために起こった誤用であるという。

- (25) 大学へ入って、話ができる人たちを会って、日本に一緒に行こうと話をたくさんしているんです。 (若生 2010 : 111)

(20)の例も同様に、「接する」は、韓国語では「を」に相当する ‘ul/lul’ が使われるために、このような誤用が起きていると考えられる。

(21)の「新宿、そして横浜で (から) 出発するバスがあります」は、迫田 (2001) の言う「ユニット形成のストラテジー」が働いた結果だとも考えられる。「ユニット形成ストラテジー」は、学習者は助詞を動詞 (この場合は「出発する」) との関連ではなく、直前の名詞 (この場合は「横浜」) と関連づけて選択する傾向があることを指摘したものである。「場所+に+存在」という文型は、「場所+で+活動的な動詞」との関連で初級のか

なり早い段階で扱われ、その後の学習過程においても何度も出てくる文型であるからである。

しかしながら、若生（2012）における「に」と「で」の選択研究では、位置名詞に「に」を結び付けるユニット形成の可能性は見られたものの、場所名詞と「で」を結び付けている証拠は見いだせなかったことが報告されている。韓国語の ‘eyse’（日本語の「で」に相当）には、日本語の場所を示す「で」の他に、「から」という起点を表す用法もあるため、これが学習による過剰般化ではなく、母語による負の転移であることが推察される。(21)の発話者はS2であるが、日本語学習歴が他の3人に比べ短い。そのことを合わせて考えても、(21)の例は、母語による負の転移と考えてよいと思われる。

5. 助詞以外の誤用

今回は取り上げられなかったが、発話中には、説明のモダリティー「の／んです」の過剰な使用、文脈の中で使われる「その」と「あの」の混同、アスペクトの間違い、わずかではあるが、敬語の間違いが4人の発話者に共通して見られた。また、使役と受身の間違いが、3人に見られた。母語を問わずに誤用が多く見られる自動詞と他動詞の使い分けの誤用もわずかであるが見られた。

適切な語彙の選択ができないことによる誤用は、すべての発話者に共通していたが、その語彙に共通する傾向は、今回は見られなかった。しかしながら、語彙の誤用数は、日本滞在期間に比例し、滞在期間が長いほど少なくなっていた。また、滞在期間が長くなると、語彙の誤用は「やる気があるなら、その割に（その分）頑張れるんじゃないかな」というような細かい話し手の判断を示すような副詞的表現が多くなり、滞在歴が短い学習ほど、「私はこのような性格をもっていますから」のような、動詞や述語部分に関する誤用の割合が増加した。特に「悪口をやる（言う）」、「政策をする（行う）」、「考えをした（考えた）」のような「名詞+する」の形の誤用が多く見られた。

インタビュー前は、発話タスクの難易度が上がるにつれ、誤用の数が増えることを予想したが、実際は難易度による変化はあまり見られなかった。難易度が高くなるにつれて観察されたのは、言いどみや自己による訂正、フィラーであったが、今回は文法などの言語形式を見るのが目的であった

ため、これらは分析対象とはしなかった。

OPIでは、突き上げと呼ばれるプロセスがある。これは、言語的挫折現象が起こる臨界域をさぐるプロセスで、発話者の運用能力の限界を探る作業である。発話タスクの難易度を高くしていくことにより、言語形式の不正確さの出現や発話の質の低下の有無を見る作業である。インタビューにおいては、この突き上げの場面で学習者が最も緊張するだろうと予想していたが、実際に緊張が見られたのはこの突き上げの場面ではなく、最後のロールプレイで敬語を使わなければならなくなった場面であった。これは、複雑なことを説明したり、反論に対してさらに反論する、というような上級や超級において要求されるタスクが、学生生活の中で日常的に行っていることと同質のことである一方、敬語を使う機会があまりないからだと考えられる。フォローアップインタビューで敬語について聞いたところ、敬語は習ってはいるものの、実際の場面に接する機会がないため、教科書の例文のような会話が実際にされているのか懐疑的に思っているという答えがあった。この発話の収録の後、1人の発話者がインターンシップに参加した。参加後に会ったときには、驚くほど敬語が使えるようになっており、インプットの量や環境、動機などの要因の重要性が改めて認識された。

6. まとめ

本データで見た韓国語を母語とする4人の発話者は、ゼロ助詞を自然に対話の中で使うことができていた。しかしながら、ゼロ助詞による発話は、どんな場合にでも受け入れられるというものでもないため、過剰な使用や誤用が定着しないよう、学習上の配慮が必要である。また、それ以外の助詞については、誤用はあるものの、発話語数全体から見れば少ないものであり、意味が通じなくなるほどの大きな間違いは見られなかった。助詞の誤用は、過剰般化などによるものもあると思われるが、母語の負の転移によるものが多いことが推察された。また、自動詞と他動詞の区別、受身、使役といった中級から扱われる文法項目において、上級であっても誤用が起きていることが観察された。語彙の選択に関する誤用は、学習歴の長さが関わっていることが疑われ、学習歴が短いほど述部における動詞の選択で誤用が生まれることが多く、学習歴が長いほど細かい判断を示す副詞的表現における間違いが観察された。

分析においては、発話の質や話し手の細かい判断といった、上級者がさ

らに次のステップに進むために課題となる部分を細かく見ることができなかった。発話の例文を再検討しなければ断言できないことではあるが、学習が進み、さらに上級の上のタスクを行うためには、動詞のバラエティが必要なのはもちろんだが、細かい状況やニュアンス、話し手の微妙な判断などを伝えるための副詞的表現が必要になってくることが仮説として考えられる。これは今後の課題である。

韓国語を母語とする学習者の上達の早さに関しては、助詞に限って言うならば、やはり母語の転移の影響が強いのではないかということが再認識された。教室現場の経験からは、助詞の間違ひはもう少し出るのはないかと予想していたが、予想より低い結果であった。要因の一つとして、本データの発話者がゼロ助詞をうまく使えているために、本来であれば誤用を起こす部分が、発話の段階で省略され目立たなくなっていた可能性がある。上級になればなるほど、同じアウトプットの練習であっても、発話場面の学習項目と、文法的な正確さが求められる作文・論文作成のための学習項目は、それぞれ独立させるべきだということが考えられた。

注

- 1 本稿では発話内部の言語形式の正誤を記述することを目的としている。そのため、次の語句は書き起こしの対象から外した。「ええっと」などのようなフィラー、「だいが」(正しくは「だいがく」)のように不完全に終わった語彙、聞き取れない語句、意味分別に影響しない発音の諸問題(母音化、拗音化など)。
- 2 MeCabは、オープンソースの形態素解析エンジンである。形態素解析用辞書 Unidicは、国立国語研究所で規定された「短単位」で設計されている。Ver.2.以降は、フリーソフトウェアになっている。
- 3 自然発話においては、「それで」が「で」と発音されたりすることがあるように、音が省略され、縮約形が頻出する。このような場合は、正しく品詞分解されないことがあるため、テキストを形態素解析エンジンにかけた後は、解析結果を確認し、一部解析結果の修正を行った。
- 4 間違った発話があったとしても、直後に自発的に訂正が行われた場合は、誤用とは認定しなかった。
- 5 日本語能力試験。N1は、「幅広い場面で使われる日本語を理解することができる」(『新しい「日本語能力試験」ガイドブック』凡人社、2009:19)とされている。

- 6 OPI判定において、「上級」は、「詳しい説明・叙述ができる。予期していなかった複雑な状況に対応できる」「インフォーマルな状況で具体的な話題がこなせる。フォーマルな状況で話せることもある」とされている（牧野他 2001：18）。判定は、筆者が行い、セカンドレイティングを別の1人が行った。
- 7 インタビューのタスクを時系列に並べ、タスクの難易度、質問に対する答えの評価などを一覧表にしたもの。
- 8 金水（1993：195）によれば、格助詞の脱落現象は、古典語においてより広範囲に現れ、特に古典語の側から見ると、もともと存在した格助詞が脱落したのではなく、無助詞の名詞句がそのまま項として解釈され得ると考えた方が自然だとしている。
- 9 ただし加藤（1997）は、両者を区別する判断は論者の言語直観のみによるものであり区別するものではないと結論づけ、両者をまとめて「ゼロ助詞」と呼んでいる。しかし本稿では、助詞を補完することによって不自然さが発生するならば、それは談話の適切さを欠くのと同じことであると考えするため、両者を区別することとした。

参考文献

- 梅田博之（1985）「韓国人に対する日本語教育と日本人に対する朝鮮語教育」『日本語教育』55号 pp.48-58 日本語教育学会
- 梅田博之監修、李翊燮・李 相億・蔡琬、前田 真彦（訳）（2004）『韓国語概説』大修館書店
- 加藤重広（1997）「ゼロ助詞の談話機能と文法機能」『富山大学人文学部紀要』27
- 金庭久美子（2003）「韓国語母語話者の動詞の使用状況」『横浜国立大学留学生センター紀要』10. pp.53-66
- 金 智賢（2009）「現代韓国語の談話における無助詞について—主語名詞句を中心に—」『朝鮮学報』210. pp.37-83 朝鮮学会
- 黒崎 佐仁子（2007）「話題提示に見られる無助詞文の条件 —ニュース見出しを中心として—」『早稲田大学日本語教育学』1 pp.67-80 早稲田大学大学院日本語教育研究科、早稲田大学日本語教育研究センター
- 迫田久美子（2001）「学習者の誤用を産み出す言語処理のストラテジー(1)―場所を表す『に』と『で』の場合―」『広島大学日本語教育研究』11. pp.17-22 広島大学教育学部日本語教育講座
- 日本語教育学会『新版日本語教育辞典』（2005）大修館書店
- 牧野成一・鎌田修・山内博之・齊藤真理子・荻原稚佳子・伊藤とく美・池崎美代子・中島和子（2001）『ACTFL-OPI入門—日本語学習者の「話す力」を客観的に測る』アルク

油谷幸利（2005）『日韓対照言語学入門』白帝社

若生正和（2010）「韓国人日本語学習者の誤用分析」『大阪教育大学紀要』第1部門 第59巻 第1号 pp.109-119

若生正和（2012）「韓国人日本語学習者による場所の格助詞「に」と「で」の選択に関する研究」『大阪教育大学紀要』第1部門 第60巻 第2号 pp.91-99

渡邊亜子（1996）『中・上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版